

## おめでとうございます

永井正子

休み明けの第一日目は、それぞれに趣があつて、好きです。

新しい保育室で、不安と期待が織り混じる中、初めての友だちと出会う四月。

「夏休みの楽しい思い出を、早く、友だちや先生に話そう」「幼稚園では、こんどは〇〇してあそぶんだ」などと、意気込んでやって来る九月。

昨日と今日と、特別何という違いがある訳ではないのに、自分も周囲も、家中が、町中が華やいで、うきうきうれしい気分になる——そのうきうき気分をすっかり持ち込んで始まる、一月の幼稚園。

あけまして おめでとうございます

「ごあいさつなさい」と促されても、はずかしそうに母親の後ろにしがみついてしまった、三歳児のAちゃん。

B君は、保育室に入るなり、べたんと正座して、「あけましておめでとうございます。ことしも どうぞよろしく おねがいます。」

C君は、「おめでとう」とひと言。

お正月の挨拶をするのが照れ臭くて、ふざけてばかりいるD君。

おしゃまなEちゃんは、お母様とそっくり同じ言葉と仕草で、新年の挨拶を済ませた。

F君。保育室に入って来るなり、「めでためたの……」とうたいだした。それも、くにやくにやと踊りながら。

四歳児のお正月。

「おめでとうございます」と言えただけれど、やっばり花笠音頭をうたっているF君。

B君は、今度は座らないで、丁寧におじぎをした。

C君、「おめでとうございます」少し言葉が増えた。お正月が来て、みんな、ちょっと大人になりました。

新しい服・新しい靴・新しいハンカチに新しいタオル……子どもの気持ちも新しくなって、急にひとまわり大きくなった感じがする四月。

夏休みの間に、家で・公園で・また海や山で、たくさんの人たちとの交わりを通して育まれたもの全てを携えて、彼らは幼稚園にやって来ます。二学期始めの日の挨拶は、お休み中の行動の総決算。

お正月の、あの何とも言えない恥じらいの中で子どもたちが見せる成長は、新年を迎えて、年齢がひとつ増えるからでしょうか。

学年が進む時や、誕生日をお祝いしてもらった時の「ひとつ大きくなった」感じとは、ちょっぴり味が違う、お正月を迎えて「大きくなった」子どもたちの感触。

「お父さんもお母さんも、幼稚園もお友だちも、わ

たしと一緒に大きくなった」と気付き、それだからこそ、相手に最もふさわしい挨拶を送ろうとする。成長を共に喜ぼうと張り切って登園して来たのに、保育室で待っていた先生は、ちっともわかってくれない。困ったな——子どもたちは、あるいは、こんなふうに考え、そのため、いつもとは違う様子で、「おめでとう」の挨拶をするのでしょうか。

卒園までの保育に残された時間は、正味二か月程。最初に描いていた事柄の多くが未完成であることへの焦りを、子どもたちには見つかからないところに仕舞込んで、残りの日々を子どもたちと楽しく過ごすためのスタートを気持ち良く切りたいものと、少々構えて待つ新学期。

おめでとうございます

この瞬間に、もうすぐ小学生になる彼らが見せてくれるであろう様々な姿を想像し、それにふさわしく私も成長したいと願うこの頃です。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)